



# A Functional Typological Study of Non-canonical Constructions

Mano, Miho

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2005-03-25

(Date of Publication)

2008-10-23

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3514

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003514>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 205 】

氏 名・(本 籍) 眞野 美穂 ( 兵庫県 )  
博士の専攻分野の名称 博士(学術)  
学 位 記 番 号 博い第578号  
学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当  
学位授与の 日 付 平成17年3月25日

【 学位論文題目 】

A Functional Typological Study of Non-canonical Constructions  
(『非規範的構文の意味機能と類型についての研究』)

審 査 委 員

主 査 教 授 西光 義弘  
教 授 窪 園 晴夫  
教 授 松本 曜  
助教授 岸本 秀樹

# A Functional Typological Study of Non-canonical Constructions

## 『非規範的構文の意味機能と類型に関する研究』

眞野 美穂

018D702H

本稿は、非規範的な格フレームを取る非規範的構文(non-canonical construction)に焦点を絞り、文の構造に関わる様々な要因を明らかにすることを目標としている。これまで文の構造を解明しようという取り組みは活発に行われてきているが、それらの問題点として、一つに普通の自動詞・他動詞構文のように(特に西洋の言語では)かなりの形式化の進んだ規範的構文が中心課題となってきたことがあげられる。しかし、日本語やアジアの言語など異なる言語を観察した場合、そのような規範的な構文以外の構文が多数観察される。文の構造と意味のかかわりの究明のためには、このような構文を無視することはできない。そして、規範的構文に比べ、より明確に意味的作用によって成否が決定されている非規範的構文の研究が重要となる。また、その際通言語的に応用可能な把握を行うことは不可欠であり、本稿では文の構造、特に非規範的構文を決定づけている諸要因を分析することによって、言語表現と意味機能の関係が可能になると考える。このような目的のもと、本稿は機能主義的な観点から非規範的構文の解明を目指すものである。

第二章から第六章は日本語の非規範的構文に焦点を当て、分析を行う。

第二章では、まず非規範的構文の範囲とその統語的・意味的特徴を様々な点から考察し、そして仮説を提示する。これまでの研究でも指摘されている通り、非規範的構文は限られた意味タイプで観察される。それは「心理状態・身体状態・所有・知覚・必要性・可能性」などの意味タイプであり、すべてある種の状態を表す表現である。非規範的構文では、第一項として現われる名詞句が、規範的な主語の格標識である主格以外の格標識(例えば与格など)を担っているにもかかわらず、統語的には主語として振舞う。そして、非意図性・制御不可能性・状態性などの意味を表す構文である。この構文は理論的な問題として、主語や自他構文に問題を投げかけるものであり、様々な枠組みにおいて研究がなされてきた。また、意味的な観点からは、非規範的構文はこれまでに、その非意図性・制御不可能性・状態性などの意味特性を担うこと、そして他動性(c.f. Hopper and Thompson 1980)の低さなどが特徴として指摘されてきたのであるが、これらはいずれも規範的な自動詞文として表される状態文にも共通する意味特性であり、非規範的構文の生起を予測するものではない。

本稿は非規範的構文をまず、「非規範的な格標識を取る主語を持ちその状態を表す構文」に限定し、以下のような仮説を立てる。

(仮説)

1. 非規範的構文は DOMAIN-THEME という意味構造を持つ構文であり、この構文に現われるには、述語の取る名詞句の意味役割が領域(DOMAIN)として解釈される必要がある。
2. (図1)に提案する意味階層(thematic hierarchy)は意味役割の領域としての解釈される度合いを表しており、低いものほど領域として解釈されやすい。
3. 領域である名詞句の文法関係は(図1)に提案する意味階層によって決定され、より高い意味役割であるほど、文の主語として振る傾向がある。

(図1) 意味階層

意味役割: 動作主 > 経験者 > 所有者 > 判断主 > 場所[+HUM] > 場所 [-HUM]  
 意味構造: AGENT → ← DOMAIN  
 文法関係: 主語 →

そして、この仮説からは反証可能性を持つ以下のような予測が得られることになる。

1. もしも、より高い意味役割を持つ名詞句が領域として解釈可能である場合、それよりも低い意味役割を持つものも領域として解釈可能である。例えば、ある言語の非規範的構文において、経験主が領域として解釈される場合、必ずそれよりも低い意味役割である所有者も領域として解釈される。ただし、逆は成り立たない。
2. もしも、より低い意味役割を持つ名詞句が非規範的構文の主語として振舞う場合、より高い意味役割を持つものも主語として振舞う。

この仮説を本稿では日本語、そして第七章では他の言語に関して検証し、この仮説がこれらの言語での非規範的構文に有効であることを示す。また、非規範的構文を他の構文との関係の中で位置づけるために(図2)に示すような概念空間(c.f. Croft 2001)を提案する。この概念空間での構文の把握は、通言語的な非規範的構文の分布を比較する際にも有効なものである。

(図2) 概念空間

	時間的持続性	低い ←	→ 高い
項の数		事象	状態
2		他動詞文	非規範的構文
1		自動詞文 (事象)	自動詞文 (状態)



間構文や属性叙述受身文などについて指摘する「属性叙述への意味タイプの転換にともなう項の現象」と同様の現象として解釈可能であることを主張した。つまり、非規範的構文は時間に位置づけられる状態(temporal state)を表すのに対して、その自動詞文は必ず時間に位置づけられない属性(atemporal property)を表すという意味タイプの転換があるのである。そのために、自動詞文が省略的なものとは感じられないのである。しかし、このことは述語が一項のみを要求することの証拠にはならないと考えられる。

第七章では、先に提案した仮説が他の言語の非規範的構文の分析に有効であるかを検証する。具体的には韓国語、ヘブライ語、南アジアの言語を対象にケーススタディーを行う。そして、本稿で示した仮説がそれぞれの言語の非規範的構文の状況に矛盾しないものであり、言語間の違いを明示的に意味役割の階層と概念空間において把握できることを示した。しかし、4つのタイプの非規範的構文を持つヒンディー語に関しては問題が残った。

本稿は、非規範的構文の類型的な把握と構文の特性の解明を目指したものである。そして、仮説として非規範的構文が基本的に領域と対象という二項を要求し、その領域での対象の状態について述べるという機能を持つものであることを主張した。非規範的構文の範囲に言語親で差が見られる理由として、どのような意味役割が領域として解釈可能であるか、そしてどのような意味役割の領域までが構文の中心となる主語として解釈されうるか、という二つの点で異なっているためであることを指摘した。また、概念空間上に位置づけることで、それぞれの言語における非規範的構文の傾向を示した。

## 論文審査の結果の要旨

氏 名	眞野 美穂	
論文題目	A Functional Typological Study of Non-canonical Constructions (『非規範的構文の意味機能と類型についての研究』)	
要 旨		
<p>従来の構文研究では普通の自動詞・他動詞構文のように(特に西洋の言語では)かなり形式化の進んだ規範的構文が中心課題となってきた。しかし、日本語やアジアの言語など異なる言語を観察した場合、そのような規範的な構文以外の構文が多数観察される。本論文は文の構造、特に非規範的構文を決定づけている諸要因を分析することによって言語表現と意味機能の関係を明らかにすることを目的として、機能主義的な観点から非規範的構文の解明を目指したものである。</p> <p>本論文は計6つの章からなっている。</p> <p>第一章は序論として非規範的構文を文法的特性と意味的特性によって規定し、本論文で提出される意味役割の階層と概念空間を導入した後、全体の構成を示している。</p> <p>第二章から第五章は日本語の非規範的構文に焦点を当て、分析を行なっている。第二章では、まず非規範的構文の範囲とその統語的・意味的特徴を様々な点から考察し、「心理状態・身体状態・所有・知覚・必要性・可能性」などの意味タイプがあり、すべてある種の状態を表す表現であることを示している。非規範的構文では、第一項として現われる名詞句が、規範的な主語の格標識である主格以外の格標識(例えば与格など)を担っているにもかかわらず、統語的には主語として振舞い、そして、非意図性・制御不可能性・状態性などの意味を表す。本論文は非規範的構文をまず、「非規範的な格標識を取る主語を持ちその状態を表す構文」に限定し、以下のような仮説を立てている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 非規範的構文は DOMAIN-THEME という意味構造を持つ構文であり、この構文に現われるには、述語の取る名詞句の意味役割が「領域 (DOMAIN)」として解釈される必要がある。</li> <li>2. 意味階層 (thematic hierarchy) は意味役割の「領域」としての解釈される度合いを表しており、低いほど「領域」として解釈されやすい。</li> <li>3. 「領域」である名詞句の文法関係は意味階層によって決定され、より高い意味役割であるほど、文の主語として振舞う傾向がある。</li> </ol> <p>本論文では非規範的構文を他の構文との関係の中で位置づけるために(表1)に示すような概念空間を提案している。</p>		
(表1) 概念空間		
	時間的持 統性	低い← 事象
項の数		→高い 状態
2	他動詞文	非規範的構文
1	自動詞文 (事象)	自動詞文 (状態)

主査記載  
氏名・印

西光義

